

ミーティングの 10のステップ



子どもたちとつくるミーティング（サークルタイム）を、10のステップに分けて詳しく見ていきます。
園で取り組む際には、まずは1つずつ、ステップを踏みながら進めていきましょう。
『保育ナビ』の毎月の連載では、現場の先生方からの疑問に、ステップごとに青山先生が答えています。
本資料と併せて、ご活用ください。

ステップ概要

ステップ0

本音を出せる環境があるか

ステップ1

集まる

ステップ2

耳を向ける

ステップ3

声を出す

ステップ4

傾聴する

ステップ5

話す

ステップ6

会話する

ステップ7

考える

ステップ8

意見を出す

ステップ9

考え合う

ステップ10

そしてまた暮らしへ

ステップ9

考え合う、話し合う

● 話し合いの実践的なコツ

今回は、これまで積み上げてきたものをベースに、子どもたちが考え合う、話し合う段階です。

ミーティングに取り組み始める時に、いきなりここから始めようとして挫折してしまう方も多いのですが、これまで見てきたような積み重ねがあって、はじめて子どもたちの「話し合い」は成り立ちます。

ここまできると、子どもたちも聞く力も育っていますし、他者に共感しながら考えることもできます。保育者としては、基本的には聞いていけばいいのですが、話し合いが始まった時に使える実践的なコツをいくつか挙げてみます。あくまで例なので、自分でやりながらいろいろ発明してみてください。

コツ1 「〇〇くんは、そう思うんだね」 (意見を個人に戻し、場を支配させない)

ある1人の意見が強くなってしまった場合、もちろんその意見は尊重しつつも、その1つの意見に場が収束してしまわないようにしたいですよ。

ふんふんと聞いた後に、「なるほど、〇〇くんはそう思うんだね」と応答します。

この「は」が重要。〇〇くんの意見として「は」最大限尊重する。でもそれは、〇〇くん「は」そう思うということであって、同じような重さで別の人の意見「も」あっていい。

だから「〇〇くん『は』そう思うんだね。なるほどね、じゃあ、□□ちゃん『は』どう思う？」とやりとりしていきます。

一人ひとりの意見を尊重すること。それは「簡単に話し合いをまとめない」ということにもつながっていきます。



コツ2 「ぐるりとひと回り」 (参加率を高める。「パス」あり)

話し合いの参加者一人ひとりに意見を求めて、参加率を高めます。ただし、一人ひとりが長くなるような回答だと時間がかかりすぎるので、「好きか、嫌いか」「行くか、行かないか」「やるか、やらないか」というクローズドな問い（話が広がっていかない問い）が向いています。

この時に「パス」（回答拒否、保留）はあり、にしましょう。

- ・そんなこと聞かれてもわからない。
- ・ほかの人の意見を聞いてから答えたい。
- ・答えたくない。

などなど、無理やり答えなくても大丈夫、ということをちゃんと保障します。

コツ3 「この人ならどう思うか聞いてみる」 (発言回数よりも、考えているかどうかが大事)

ある話題の時に、「これについて、あの子に聞いてみたらどう答えるだろうな」と思うことがあります。普段の一人ひとりを知っている担任ならなおさら。

そういう時は、「○○ちゃんなら、どう思う？」と指名してみます。

遊びの話題なら、同じような遊びをしている子。けんかの話題なら、同じようなけんかが前にあった子。ふと、この子なら、これについてどう思うのだろうと思う時。

ミーティングでは発言回数の多い少ないよりも、考えているかどうかが大事です。あまり話さなくても考えている顔をしている子もいます（反対に、よくしゃべってはいてもあんまり考えていない子もいます）。じっと何か考えているなあという子に、「これ、どう思う？」と聞いてみてもおもしろいです。

コツ4 「おとなに振ってみる」 (空気の入替え。おとなもメンバーの一員)

みんなで話していて、だんだん集中力が下がってきてしまう時もあります。そんな時は、おとなに振ってみます。おとなは話すのが上手なので、子どもたちの集中力もう一度戻って、空気を入れ替えたように耳を傾けてくれます。この時に大事なのが、「先生」としての「正しい意見」を言ったり、押し付けたりしないこと。これは、前にあげた「よいこ」発言の大量生産につながるだけです。

おとなも話し合いのメンバーの一員として、1人の人としての「自分はこう思う」という意見を言ってください。

子どもとの対等な関係ができていれば、子どもたちも「へえ～、そんなふうにおもうんだ」とフラットに聞いてくれます。

コツ5 「煮詰まったら極論を出してみる」 (そもそも、を考えるために)

おとなが意見を言う時のもう1つのパターンとして、「あえて極論を言う」というのがあります。これは、子どもたちの話が常識的な（よいこ発言もここに含まれる）枠でぐるぐる回ってしまっている時にも有効ですし、みんなで一生懸命考えているんだけど、どうにも煮詰まってしまった時にも有効です。

これは5歳児だけで話し合いをしている時などにたまに起こります。

「そんなの（まで）いいの？」というような、枠を広げるような発言をしてみます。

4歳も交ざって話し合いをしていると、4歳のやわらかい、自由な発想から、話し合いをほぐしてくれる場合もよくあります。

例えば、グループの名前を決める時に、5歳は「にじ」とか「おしろ」とか「おやつ」とかそういうあたりで出すことが多いです。4歳から出たのは、「しみ。ほら、かべとかについてるやつ」でした。こういうのが出ると、「なるほど、そこまで自由でもいいのね」となり、場が一気にやわらかくなります。